

# 熊本市方言における待遇表現

日 高 朱 梨

## 1. はじめに

現代の熊本方言においては、様々な待遇表現が存在し、敬意や場面などによって使い分けられている。本稿では熊本県の西北部に位置し、熊本県の県庁所在地かつ政令指定都市である熊本市の方言において、日常的に用いられている待遇表現についての調査結果を報告する。

当該地域の待遇表現については先行研究として藤原（1978, 1979）による分布調査等があげられるが、それらの研究は敬語形式の分布を調査するにとどまっており、使用における世代差や使用形式の変容についての報告は乏しい。

本稿では当該地域でどのような待遇表現が現存しているのかを調査するだけでなく、敬語形式の現状と運用の変遷を分析していく。

## 2. 先行研究

先行研究として、熊本市域・熊本県内における尊敬語表現の研究には藤原（1978, 1979）、神部（1992）、新堀（1997）、渡辺（2017）、岩永（2018）、尾川（2018）があるが紙幅の都合で詳細は省く。

## 3. 調査概要

調査期間は令和3年11月～12月である。インフォーマントは現在熊本市に在住し、言語形成期を熊本市で過ごした、もしくは在住歴が年齢の8割を超える年数である8名（A-H）を対象とした。本稿では、インフォーマントA、Bを高年層、C～Eを中年層、F～Hを若年層と分類し、分析する。

A：80代男性 B：70代男性 C：50代女性 D：50代男性

E：50代女性 F：20代女性 G：20代女性 H：20代女性

本調査の内容としては、始めに当該地域で使用される待遇表現の形式を確認した。藤原（1978, 1979）及びそれに付録されている図版から当該地域で使用されていると予想される形式を抜粋してこれをもとに使用可能かを調査した。具体的にはインフォーマントA、Cに対し調査を行い、待遇表現の有無や聞きおぼえがあるかを確認した。

次に待遇表現の運用方法について調査を行った。当該地域で使用される形式について活用の調査をし、さらに聞き手や動作主体ごとの使い分け調査を行った。使い分け調査は全インフォーマントを対象に行い、各世代にそれぞれの形式で使用範囲を確認した。

#### 4. 調査・分析

##### 4.1. 使用される待遇表現形式の確認

###### 4.1.1. 調査方法

調査にあたって、渡辺（2017）の方針を参考にした。当該地域で現在使用されている方言の待遇表現を調査するため、藤原（1978, 1979）とその付録の図版をもとに表1を作成し、実際の使用状況を面接形式で調査した。

以下、当該地域で確認される可能性があると予想した待遇表現をまとめたものが表1である。例として取り上げる基準を後述のように設けた。

- ①図版にて当該地域かその周辺に網掛けがなされている。
- ②当該地域には網掛けがないが近隣、主に肥筑地方に網掛けがなされている。
- ③網掛けはないが、本文中で言及されている。

話者から表1にはない回答が得られる可能性があり、記載のなかった形式が表れることにも留意しつつ調査をした。

表1 当該地域で確認される可能性のある形式（藤原（1978,1979）参照）

尊敬形	ゴザル、動詞連用形+て+指定動詞（「来テジャ（ヤ）」など）、～レル・ラレル、～シャル・サツシャル、～ナル、ナッス、イ・サイ
謙讓形	「拝領」との言いかた（「読んでハイヨー。」など）
丁寧形	ゴザス、（ヤンス、デス）

渡辺（2017, p.4-5）を参考にして様々な動詞に対し表1の使用状況の調査を行った。紙幅の関係で資料は掲載できないが、[-nahar-][-as/-ras-]は原則として全ての動詞に接続可能であると考えられる結果であった。

###### 4.1.2. 調査結果

使用形式はインフォーマント A、C に対して調査をした。なお、[ ] は通常、IPA 記号を表わすものであるが、本稿では渡辺（2017）等と同様に、[-nahar-] 形式といったように待遇表現の形式を表すために使用する。

渡辺（2017）を参考に標準語の口語文法の活用に沿った動詞表を作成し、調

査を行った。紙幅の都合で表の詳細は省く。調査結果は以下の通りである。A、Cの両者の使用形式にはほぼ差が見られず、基本的には全ての動詞に[-nahar-][-as-/ras-]は接続可能であった。[-nahar-]が使用できないと回答があったのは、「浴びる」、「伸びる」、「告げる」であった。[-nahar-][-as-/ras-]の双方が使用不可であったのは、「減る」、「干る」、「得る」、「経る」であった。使用不可とされた理由は、使用頻度が低いなど語彙に個別の理由であって一般化はできないと思われる。

また今回の調査で、[-nahar-][-as-/ras-][-des-]を使用していることが確認された。調査での回答から、[-nahar-]は連用形、[-as-/ras-]は未然形、[-des-]は終止連体形に接続することがわかった。表1の予想していた形式よりも調査で確認された形式は大幅に少ないものとなった。

本稿ではここから特にインフォーマントAの回答を参考に論じていく。最も多く見られたのは[-as-/ras-]形式であり、今回回答を得られた殆ど全ての動詞に接続が可能な形式であることがわかった。この形式は表1には挙げられていないが、筆者(熊本市出身20代前半)の内省が効くこと、話者から回答が得られたことから現存するとした。また、神部(1992)の先行研究では、藤原与一(1978, p.290)による以下の記述に関して「～ス・ラス」の生態からしてこの推定には異存がない(神部1992, p.241)としている。「～シャル・サッシャル」が予測される地域である熊本市域において[-as-/ras-]形式が存在することは、道理にかなっていると筆者も考える。

未然・連用・命令の諸形に、「シャル・サッシャル」の直音化が認められるとされる。ところで連用形の「行かした」「ござらした」「出らした」などの「シ」の言いかたは、未然形の「サ」形にも増して、実生活上、よく用いられてきていよう。(動詞利用での連用形利用の頻度の高いことは、明らかな事実であろう。)'シ'の頻用につれて、人は、その「シ」から、しぜん、終止形「ス」をひきおこすことになったと思う。五段活用方式からの類推があったろう。「～サッシャった」の「～サした」からは、「サス」をひきおこしたと思う。こうなって、「～シャル・サッシャル」に関する、「～ス・サス」系の言いかたが成立したと私は考える。

[-as-/ras-]形式は第三者待遇でのみ用いられる形式である。インフォーマントAは日常的に頻繁に使用すると回答した。渡辺(2017)や尾川(2018)では、[-as-/ras-]は高年層において軽卑的なニュアンス含む表現として捉えられ、使用は避けられるとされていたが、インフォーマントAにはそのような意識は

ないようであった。目上から目下、目下から目上、いずれにも用いることができ、尊敬表現というよりも丁寧表現としての意識が強いようであった。

[-nahar-] も [-as-/ras-] と同様にほぼ全ての動詞に接続する。しかし「ある」のように、[-as-/ras-] の接続は違和感がないものの、[-nahar-] を接続させるのは違和感があるという動詞が、両インフォーマントにほとんど共通していた。特に上一段活用の動詞に [-nahar-] の使用に違和感があるまたは使用しないという回答が集中していた<sup>1</sup>。日常会話において [-nahar-] より [-as-/ras-] を使う機会が多く、[-as-/ras-] の方が使用しやすいという内省が両インフォーマントに共通していた。[-nahar-] は主語が二人称、三人称に関係なく用いることが可能な形式である。[-as-/ras-] よりも尊敬度の高い形式であると認識しているとの回答があり、目上に対して使用される。これも両インフォーマントにおいて共通する意識であった。

終止形 + [-des-] (「デス」) は、同一方言話者で目上かつ疎遠な人、親しくとも立場が上の人を使用するとの回答を得た。使用の際には、「来たです」というよりも「来なはったです」や「来らした」のように [-nahar-] や [-as-/ras-] の過去形に下接する形で用いていた。「～ヨル・トル」に下接する場合は、[-des-] の直前が促音化するという特徴が観察された。

以上、4.1 節の調査の範囲で確認された当該地域で使用される待遇表現についてまとめたものが (1) である。

- (1) 熊本県熊本市北区清水万石の高年層、および中年層における待遇表現  
Ⅰ. 待遇表現として現存するのは [-nahar-]、[-as-/ras-]、終止形 + [-des-] の 3 形式である。
- Ⅱ. [-nahar-] は主語の二人称、三人称の別なく使用できる。[-as-/ras-] よりも敬意が高い表現であると認識されている尊敬表現である。
- Ⅲ. [-as-/ras-] は第三者待遇にのみ用いられる。目上から目下まで対象となり、日常的によく使用されている。[-nahar-] より敬意度が低い。
- Ⅳ. 終止形 + [-des-] は目上の動作に用いる表現である。[-nahar-] や [-as-/ras-] の過去形と共に使用される傾向にある。「～ヨル・トル」に下接する場合は [-des-] の直前が促音化する。

以下、現存している形式について調査結果をもとに分析していく。

---

1 今回のデータでは偏りが見られたので記しておくが、活用が [-nahar-] の使われにくさに直接関係しているという明らか証拠はない。

## 4.2. 聞き手・動作主体による使い分け調査

今回は第三者待遇で使用する待遇表現 [-nahar-]、[-as/-ras-] について動作主体と聞き手の違いによる使い分けに注目し、インフォーマント A～H に対して調査を行った。話者と聞き手で一对一の会話をする場面を想定し、話者と聞き手と動作主体（話題の人物）の親疎関係、立場の違いを考慮したうえで [-nahar-]、[-as/-ras-]、標準語尊敬形がそれぞれ使用可能かを調査する。聞き手と動作主体の組み合わせ（ $7 \times 7 = 49$  通り）ができる。これをさらに肯定文、否定文、疑問文の3パターン用意し、インフォーマント A～H に回答してもらった。聞き手及び話題の人物（動作主体）は以下の通りである。

### 【人物設定】

- ・目上（親）：自分の両親、
- ・目上（疎）：校長先生
- ・対等（親）：自分の友人、
- ・対等（疎）：顔見知り程度と同級生
- ・目下（親）：自分の妹弟、
- ・目下（疎）：顔見知り程度の後輩
- ・動物（疎）：猫

### 4.2.1. インフォーマント別の調査結果

調査結果をまとめると以下のとおりであった。まず、A は調査対象の中でも最年長であり、出生～現在まで熊本県熊本市北区清水万石に在住している。[-nahar-] は聞き手が目上のときは否定文で、対等のときは肯定文、否定文、疑問文で使用していることが確認された。動作主体が目上（疎）である場合、[-nahar-] の使用が他の動作主体より多く、その次は目上（親）に対しての使用が多かったため、上向きの待遇表現として使用していることがわかった。

A の内省によると、[-nahar-] は敬意が高く、目上の動作に対して用いることが多い表現であるとしていた。

肯定文、疑問文では聞き手が対等～目下のとき、目上から目下までの動作主体に [-as/-ras-] を用いることができるが、否定文では聞き手が対等～目下のとき、目上（特に（疎））の動作主体には [-as/-ras-] を使用するものの、対等から目下の動作主体には一部にしか回答が得られなかった。

また、聞き手が目上（疎）の疑問文のとき、動作主体が目上、もしくは目下（親）の場合、[-as/-ras-] の終止形（過去形）に加えて [-des-] をも用いると回答した。この [-des-] 形式を用いることで聞き手へ敬意を示そうとしていた。

さらに、今回の調査の中で、A は聞き手が目下（親）のとき、目下（疎）が

動作主体の場合に「寝とらる」も使用できると回答があった。これについての詳しい調査は時間的な制限でできなかったのだが、[-r/-rar-]形式の使用が当該地域にも残っていたということが判明した。動作主体が動物の場合は[-nahar-]、[-as/-ras-]は使わないとのことである。

次にBは熊本市中央区の桜町に生まれ、疎開先の福岡県福岡市で過ごしたのち、10歳で熊本市に戻り、以降桜町に在住している。Bの父親や親戚が熊本市方言話者であったこと、70年近く熊本市に住んでいることから、熊本市方言のインフォーマントとして問題がないと判断した。

[-nahar-]はあまり使用しない傾向にあったが、聞き手が目上の場合、その他の場合よりも使用が増えた。[-nahar-]は動作主体が目上である場合のみに使用し、特に目上（疎）に対して使用することが多く見られた。

[-as/-ras-]は聞き手が目上の場合、動作主体が目上となる話題に使用するのほとんどであり、尊敬形として使われているように思えた。聞き手に関係することなく、目上（疎）につく場合が一番多い傾向にあった。一方、聞き手の立場が下がるほど、動作主体に対する使用範囲の許容が広がっていった。動作主体が動物の場合は[-nahar-]、[-as/-ras-]は使わないとのことである。

CはAの娘であり、Aと出生～現在まで熊本県熊本市北区清水万石で同居している。内省として同世代の妹（話者E）よりも熊本市方言を頻繁に使用すると回答があった。[-nahar-]、[-as/-ras-]の両方を日常会話で用いる。

[-nahar-]は、聞き手が目上（疎）の場合に活用対象が一番広くなり、疑問文において聞き手が目下（疎）までの場合または動詞（疎）以外のすべてが対象となった。また、目上（疎）との会話場面において、「[-nahar-]の終止形（過去形）+[-des-]を用いることで、聞き手へより一層敬意を示している。」という内省を持っているとのことである。

目上（親）との会話場面では、[-nahar-]の使用は動作対象が目上（疎）のみに限られた。その他聞き手が対等、目下の場合、[-nahar-]の使用は動作主体が目上（疎）の場合には必ず使い、そして動作主体が目上（親）のときにも使うことができるという回答であった。一部対等関係にある動作主体に用いることもあったが、目下と動物には運用が見られなかった。

[-as/-ras-]はほとんどの場合、目上から目下まで親疎の別なく使用すると回答していた。一部、動作主体が顔見知りの後輩の場合には使用できないとしていた。目下（疎）に使用できないことに対しては、対人関係の中で一番敬意と親しさの度合いが低くなる相手であることが原因だと推察される。敬意が一番

高くなる聞き手の目上（疎）に対しては [-as/-ras-] の終止形（過去形） + [-des-] を用いると回答しており、[-nahar-] の終止形（過去形） + [-des-] と同様に、聞き手へより一層敬意を示そうとしていた。動作主体が動物の場合は [-nahar-]、[-as/-ras-] は使わないという回答であった。

D は言語形成期を 0 歳～ 4 歳は熊本県熊本市北区楠、それ以降は熊本県熊本市東区八反田で過ごし、二年間の福岡市在住後～現在まで熊本市内に暮らしている。D は C とあまり年が離れていないにも関わらず、使用に差がある。まず、[-nahar-] は一切使用がみられなかった。D は「ナハルは年配の言葉だ。」と回答した。[-as/-ras-] に関してもほとんど使用がみられず、唯一聞き手が対等（親）のとき、目上（疎）の動作主体に対して用いることができるとしている。このとき、否定文に関しては「予想に反したことに対する驚きの要素が入るときだけ使う。」と限定していたため、個人的に例を挙げてもらった。

例（仲の良い同僚（対等・親）に対し）社長（目上・疎）がゴルフに来らっ  
さんかったもんね。（訳：社長がゴルフに来られなかったものね。）

[-nahar-]、[-as/-ras-] に関し「敬意の差があまりわからない」と回答した。

また、聞き手が目上（疎）の場合は基本的に標準語尊敬形を用いると回答していたが、否定文のみ終止連体形 + [-des-] も使用可能であると述べていた。これに関しても個人的に例を挙げてもらった。

例（社長（目上・疎）に対して）同僚（対等・親）が来なかったです。（訳：  
同僚が来なかったです。）

D の内省としては「方言は日常的に使用するが、敬語を使うような相手であれば標準語を使う」と回答があった。動作主体が動物の場合は [-nahar-]、[-as/-ras-] は使わないとのことである。

E は A の娘であり、父 A、姉 C と 20 年間同居していた。27 歳から現在に至るまでは D と同居の家族である。出生から現在まで熊本市内に在住している。E は日頃あまり方言を使用しないとの内省があり、C と同年代だが差異が大きい。[-nahar-] はほぼ使用がみられず、聞き手が目上（親）のときのみ「使えないこともない」と言う。また、「ナハルは目上向けだけれど、方言だから標準語（尊敬形）より丁寧さに欠ける。」という内省がある。

[-as/-ras-] は聞き手が目上（疎）以外のときに確認できた。聞き手が目上（親）、目下のとき、目上の動作主体にのみ用いていた。聞き手が対等である場合は運用範囲が広がり、肯定文において目上及び対等な動作主体に対して使用が可能となった。動作主体が動物の場合は [-nahar-]、[-as/-ras-] は使わないとのことで

ある。

Fは出生～現在まで熊本市内に在住している。[-nahar-]について、意味はわかるが使用しないと回答した。[-nahar-]は[-as/-ras-]よりも敬意が高く、目上に使うものであるというように認識していた。

[-as/-ras-]は動作主体が目上（疎）である場合、聞き手が目上（親）、対等、目下のとき、文の種類によらずほとんど全てで確認できた。各項目ごとにまとめると以下のとおりである。

聞き手が目上（親）のとき、否定文では動作主体が目上（疎）のみ、疑問文では目上と対等（疎）に使用していた。

聞き手が対等（親）のとき、肯定文では動作主体が目上、対等、目下（親）まで、否定文では目上のみ、疑問文では動物以外には全て使用可能であった。

聞き手が対等（疎）のとき、肯定文では動作主体が目上、対等まで、否定文では目上（疎）、対等（疎）のみ、疑問文では動物以外には全て使用可能であった。

聞き手が目下（親）のときはあまり用いず、肯定文、否定文については、動作主体が目上（疎）のときのみ、疑問文では目上（疎）と目下（親）に用いていた。

聞き手が目下（疎）の場合、肯定文では動作主体が目上（疎）、対等（親）のとき、否定文では、目上（疎）のみ、疑問文では目上、対等、目下（親）に対して用いていた。

疑問文において最も使用が多く、一番広範囲に使っていた。動作主体が動物の場合は[-nahar-]、[-as/-ras-]は使わないということである。

Gも出生～現在まで熊本市内に在住している。若年層の中で唯一[-nahar-]が使用可能であると回答した。[-nahar-]は聞き手が目上の場合、目上（疎）の動作主体にのみ使用することが可能であった。「[-nahar-]の方が[-as/-ras-]よりも敬意が高く、目上に対して使うものである。」と回答があった。

[-as/-ras-]は目上の動作主体にのみ使用し、特に目上（疎）に使用していた。動作主体が動物の場合は[-nahar-]、[-as/-ras-]は使わないと述べていた。

HはD、Eの娘で、同居の家族である。出生～現在まで熊本市内に在住している。[-nahar-]は使用しないが意味はわかると回答し、「[-as/-ras-]よりも[-nahar-]の方が敬意は高く、高年層が使っている形だと思う。」と述べていた。

[-as/-ras-]は聞き手が目上（疎）以外の場面で使用していた。それ以外の場合では、聞き手に関係なく、動作主体が目上（疎）の場合には必ず用いていた。各項目にまとめると、以下のとおりである。



聞き手が目上（親）のとき、[-as/-ras-]は目上が動作主体の場合に文の種類によらず広く使用し、さらに、否定文、疑問文のときは「対等関係にある動作主体にも使えないことはない」とのことである。

聞き手が対等（親）のとき、肯定文では目上、対等の動作主体に、否定文では目上（疎）、対等（疎）に対してのみ、疑問文では目上（疎）、対等、目下（疎）に対して使用している。

聞き手が対等（疎）のとき、肯定文では目上（疎）、対等、目下（疎）の動作主体に対して、否定文では目上（疎）の動作主体に対してのみ、疑問文では目上（疎）の動作主体に対して使用できるようである。

聞き手が目下（親）のとき、肯定文では目上（疎）、対等（疎）の動作主体に対して、否定文では目上（疎）の動作主体にのみ、疑問文では目上（疎）の動作主体に対して主に使い、目上（親）に使えないこともないとしていた。

聞き手が目下（疎）のときは、全ての文の種類において目上（疎）のみに使用していた。動作主体が動物の場合は[-nahar-]、[-as/-ras-]は使わないとのことである。

#### 4.2.2. 調査結果のまとめ

第三者待遇において高年層・中年層・若年層の各世代でそれぞれの使用形式が異なっていることがわかる。高年層において[-nahar-]は尊敬度の高い丁寧な表現として目上に対して使用されている。特に目上（疎）に対する使用が多かった。先行文献で挙げた他地域よりも[-nahar-]は使用頻度や使用範囲が狭い傾向にあった。調査の際に、高齢ゆえに目上と話す機会が少なく、場面想定が少し難しいと述べていたこともあり、実際に目上と話す際には、使用回数ももう少し多くなるのではないかと推測する。しかしながら、高い敬意を持つこと、ほぼ目上専用であることは高年層話者に共通していた。[-as/-ras-]に関しては、高年層は使用の範囲が比較的広い傾向にあった。高年層における[-as/-ras-]は、聞き手が誰であろうと、目上（疎）の動作について使用される場合が一番多い傾向にあり、尊敬形としての機能を果たしている。その一方で、聞き手の立場が下がるほど、動作主体の範囲が広がっていく傾向にある。高年層における[-as/-ras-]というのは、聞き手への軽い丁寧さを示しながら、聞き手の立場が対等～目下の場合、動作主体が目上だと尊敬表現的役割を併せ持ち、動作主体が対等から目下の場合は、尊敬というよりも親愛を表わすような表現と言えるのではないかと考える。

中年層では [-nahar-] の運用に大きな差異があった。C は [-nahar-] を頻繁に使用し、聞き手が目上（疎）のときに、使用の範囲が目下（親）の動作主体までと広いのが特徴的である。その他の聞き手の場合は主に目上の動作主体に対し用いる。C について、聞き手が目上（疎）のときに使用範囲が広がる要因として、聞き手である目上（疎）に対し、より丁寧な言葉遣いを用いようとする C の配慮が挙げられる。また、目上（親）との会話場面では、[-nahar-] の使用は動作主体が目上（疎）のみに限られる。これは聞き手である目上（親）より目下の人物には [-nahar-] を使用しないということによって、聞き手への配慮を示すものだと考える。D、E ではほとんど使用が見られなかったが、E は目上向けの表現であると内省していたので、この世代においても [-nahar-] は目上向けの尊敬表現だと言えると考えた。しかし、D のように日頃から [-nahar-] を使わなければ、敬意の差があまりわからないということにもなりうるということがわかった。C については、高年層と中年層の間ぐらいの感覚を持っているのではないかと推測する。[-as-/ras-] に関しては、聞き手が対等のときに使用の許容や使用範囲が広がる傾向にあった。また、聞き手が親しい間柄の場合での使用が比較的多かったため、身内間で使用する軽度の丁寧な表現という見方が高年層と共通していると言える。[-nahar-] をほぼ使用しない D、E は [-as-/ras-] を特に目上の動作対象に用いる傾向にあり、[-nahar-] の代わりに [-as-/ras-] を尊敬表現として扱っていると考えられる。

また、中年層 C、D は敬意が一番高くなる目上（疎）に対し終止連体形 + [-des-] を使用すると回答した。D は動詞の過去形 + [-des-] を使用することもできると回答した。C は [-as-/ras-] の終止形（過去形） + [-des-]、[-nahar-] の終止形（過去形） + [-des-] を使用すると回答した。尊敬表現や丁寧表現の [-nahar-]、[-as-/ras-] に [-des-] を後接することで聞き手へより一層敬意を示そうとしていた。このことから C は [-nahar-]、[-as-/ras-] だけでは聞き手である目上（疎）に対する敬意が不足すると捉えており、終止連体形 + [-des-] を用いてその敬意を補っていると言える。よって、特に尊敬表現の [-nahar-] が持つ敬意は高年層よりも低いものと捉えていると考えられる。E の「ナハルは目上向けだが方言故に標準語尊敬形より丁寧さに欠ける」という内省があることも踏まえると、中年層におい

---

2 例：友人が来（こ）んかったです。（訳：友人が来なかったです。）

3 例：親がさっき来（こ）らしたです。（訳：親が先ほど来ました。）

4 例：他校の校長先生が来（き）なはったです。（訳：他校の校長先生がいらっしゃいました。）

て[-nahar-]の敬意度が下がってきていると言える。

若年層ではGのみ[-nahar-]を使用し、他二人には全く使用が見られなかった。Gは聞き手が目上のときのみ使用しており、聞き手が対等～目下には用いてなかったことから、聞き手が[-nahar-]を使用する世代か否かに合わせて運用していると考えられる。他の若年層も、「使用はしないが目上に敬意を表すために使うものである。」という認識は共通しているため、上の年代の実際の使用場面に遭遇したときに自然とその敬意の方向や度合いを学んだのだろう。

全体を通してみていくと、[-nahar-]は世代が下るにつれて使用することが明らかに減っているため、今後当該地域では衰退する可能性が高い。一方、[-as-/-ras-]は目上に対する尊敬形として全年代で共通しており、軽い丁寧形（聞き手への敬意を示す）としてのニュアンスも併せ持つ。[-as-/-ras-]は第三者待遇であり、標準語では表せないニュアンスを含むため、若年層においても日常的に使用する機会が多いのではないかと考える。今後も身内間で運用するカジュアルな尊敬表現、軽い丁寧表現として残っていくと推測する。

また、全体として話し手と動作主体の関係性によって[-nahar-]、[-as-/-ras-]の使用の有無を判断しているが、聞き手にとって動作主体が目上・対等・目下かどうかをも考慮しているようであった。聞き手にとって動作主体が目上であれば方言形の待遇表現の中でも敬意の高いものが出やすい傾向にあった。[-nahar-]と[-as-/-ras-]を比較したときに、敬意度については個人差や年代差があるが、個人の中でより敬意の高いものが出てくるという傾向がみられた。(i)話し手と動作対象の関係、(ii)聞き手と動作主体の関係、とすると、(i)が優先だが、(ii)の要素も考慮される傾向がある。[-nahar-]は聞き手が目上（親）の場合、動作主体が目上（疎）のときにも使用が確認されたが、聞き手が目上（疎）の場合は、動作主体が目上（親）となると比較的付きにくいようであった。[-nahar-]では(ii)がやや強く意識されていると考える。[-as-/-ras-]は動作主体が目上（疎）のときに使用が多いものの、通時的に使われ方の変動や世代差が大きいことから、使用における個人差が大きくなっている。

さらに、動作主体が動物の場合は待遇表現を使用しないという特徴が、当該地域では全世代に共通していた。熊本市方言の特徴と言ってよいだろう。

加えて、4.2.1節の調査時に、インフォーマントAから[-r-/-rar-]の使用が確認されたため、例を挙げてもらった。

例 「寝とらる」(訳：寝ている)(聞き手目下(親)×動作主体目下(疎))  
「足をこねらいた」(訳：足首をこねた(ひねった))(聞き手目下(親))

×動作主体対等～目下（親）

「こねらいた」ではイ音便化が起きている。主に目下向きの第三者待遇表現であり、[-as-/ras-]よりも敬意が低いようであった。他のインフォーマントには使用が確認されなかったため、当該地域では消滅寸前の形式なのではないかと考える。

熊本県内の他地域では、[-as-/ras-]が下向きの待遇表現として扱われているが、熊本市域では[-as-/ras-]が高年層においても高い敬意を保っている。そのため他地域における目下の第三者待遇である[-as-/ras-]の代わりに[-r-/rar-]形式が担っているのではないかと考えた。先行研究として挙げた尾川（2018）でも、葦北郡芦北町における「～ル・ラル」について指摘があった。概要をまとめると、「～ル・ラル」は第三者待遇の敬語であるが、動作主体は対等もしくは目下のみに限られ、敬意はなく、親愛などの意味を持つ。対等以下への待遇表現はこの形式のみで、中年層以降ではこの用法は見られない、とあり、今回の事例とほぼ共通していると言える。

4.3. [-nas-]の命令形 [-nasse]

当該地域では[-nas-]の命令形[-nasse]（[-nassyce]）が存在していることが神部（1992）によって指摘されていたため、インフォーマントA～Hに対して調査を行った。命令形の[-nasse]を使用可能な相手かどうかについて、使用可は○、使用不可は×と回答してもらった。調査結果は表2のとおりである。

表2 [-nasse]の使用が確認された相手

	目上 (親)	目上 (疎)	対等 (親)	対等 (疎)	目下 (親)	目下 (疎)	動物 (疎)
A	○	×	○	○	○	○	×
B	×	×	×	×	×	×	×
C	○	×	○	○	○	○	×
D	○	×	×	×	×	×	×
E	×	×	×	×	×	×	×
F	×	×	○	○	×	×	×
G	○	×	○	×	×	×	×
H	×	×	×	×	×	×	×

[-nas-]の命令形[-nasse]は対者敬語として扱われていることが調査によってわかった。神部（1992, p256）に「全年齢層に広く行われ、その実用の心意も

やや軽くて気やすいものになっている。」とあり、今回の回答の中でも、語気を和らげる役目を持ち、親愛の情を示したり、軽い敬意をもって促すようなニュアンスを表現したりするという意識が全インフォーマントに共通していた。そのため [-nasse] は標準語には置き換えにくく、[-nas-] としての使用が確認されなかった当該地域でも化石化して若年層まで残っていると考えられる。使用にばらつきはあるものの、高年層とそれに近い形式を使用する傾向にある中年層は目上（疎）と動物以外に使用が可能である。中年層 D 以降のより若い世代は目上から対等の相手に対して用いる傾向があった。あくまでも方言形式であるため、目上（疎）に対しても使用は失礼であるというのが全インフォーマントに共通していた。動物に対して使用しないことについては、そこまで丁寧な表現を動物には使用しないとの回答があり、全員に共通していた。

例 《友人に対して》はよきななせ。（早く来なよ。）

#### 4.4. 命令形（禁止表現）[-nasuna]

[-nas-] から派生した禁止の命令表現である [-nasuna] についても調査中に指摘があったため、簡易的な追加調査を行った。対象者はインフォーマント A（高年層）、C（中年層）、D（中年層）、G（若年層）である。禁止の命令表現である [-nasuna] を使用可能な相手かどうかについて、使用可は○、使用不可は×と回答してもらった。調査結果は表 3 のとおりである。

表 3 [-nasuna] の使用が確認された相手

	目上 (親)	目上 (疎)	対等 (親)	対等 (疎)	目下 (親)	目下 (疎)	動物 (疎)
A	○	○	○	○	○	○	×
C	×	×	×	×	○	○	○
D	○	×	○	○	○	○	×
G	○	×	○	×	○	×	×

[-nasuna] は対者敬語である。高年層 A においては目上から目下まで使用可能で、「～すんな」と言うよりも丁寧な形式であり、語気を和らげるという内省を得ている。中年層 D も A の内省と内容がほぼ共通していた。しかし、中年層 C からは「これは主に目下向けの表現で丁寧ではなく、語気を強める役割がある。」という A、D とは真反対の回答を得た。若年層 G は親しい関係にあるならば目上から目下まで使用可能としており、命令形の語気を和らげる役

割があるとしていた。

なぜ中年層Cにおいて他のインフォーマントと対立する例が出てきたのかまでは、情報が足りないので分析できていないが、熊本市域の対者敬語の例として今回取り上げて記述しておくことにした。

例《弟に対して》いらんことしなすな。(余計なことをするんじゃない。)

## 5. まとめと今後の課題

今回の調査の範囲で確認された、日常的に使用される待遇表現の形式は、[-nahar-]、[-as-/ras-]、終止形 + [-des-]、[-r-/rar-]、[-nas-] の5形式である。[-nahar-] は主語の二人称、三人称の別なく使用できる。[-as-/ras-] よりも敬意が高い表現であると認識されている尊敬表現である。主に高年層で用いられる表現であり、中年層ではその運用に個人差があり、目上向けの尊敬表現であるものの、高年層よりも敬意度が低くなり、標準語尊敬形より敬意は低いものとして扱われていた。終止連体形 + [-des-] を併用して聞き手への敬意を示そうとする事例も見られた。若年層ではほとんど使用がみられないが、目上に向けた尊敬表現であるという意識は残っている。[-nahar-] は方言における尊敬形としては高い敬意を有するが、あくまで方言形であることから高年層であっても標準語尊敬形との併用がみられ、中年層以降 [-nahar-] では敬意度が低減し、標準語尊敬形のほうが敬意の高いものとして扱われるようになっている。

[-as-/ras-] は全ての世代で第三者待遇にのみ用いられ、日常的によく使用されている対遇表現である。高年層において [-nahar-] よりも敬意度が低いが目上から目下までの広い範囲の動作主体について用いることができる。高年層における [-as-/ras-] というのは、聞き手への軽い丁寧さを示しながら、聞き手の立場が対等～目下の場合、動作主体が目上だと動作主体に対しての尊敬表現的役割を併せ持ち、動作主体が対等から目下の場合は、尊敬というよりも親愛を表わす表現となるのではないかと考える。

中年層以降は軽い丁寧形というよりも、尊敬形としての使用が増える。第三者待遇の尊敬語としての [-nahar-] が使用されていたところに、[-as-/ras-] が代わって使用されるようになったと言える。

また、全インフォーマントに共通して、動作主体が動物の場合は [-nahar-]、[-as-/ras-] を用いることはない、というのも当該地域の特徴であり、ここからも [-nahar-]、[-as-/ras-] がある程度敬意や丁寧さを保っていることがわかる。

終止連体形 + [-des-] は目上(疎)が聞き手の場合に用いる丁寧表現で、[-nahar-]

や [-as-/ras-] の過去形と併用される傾向にある。「～ヨル・トル」に下接する場合は [-des-] の直前が促音化する。若年層では衰退した形式である。

[-nas-] については命令形の [-nasse]、禁止の意を表わす [-nasuna] として化石化した表現が残っていることが確認された。全体の傾向としては語気を和らげる役割を担っているが、話者によって一部例外が見られた。

[-r-/rar-] は第三者待遇でのみ用いられる。聞き手及び動作主体が対等～目下に使用される下向きの待遇表現である。[-as-/ras-] よりも敬意度が低い。中年層以降はみられないため消滅寸前であると言える。

以下図1は、本調査の結果を図式化したものである。本稿の調査地域では、先行研究で挙げた熊本県菊池郡大津町、上益城郡嘉島町、葦北郡芦北町よりも多様な待遇表現が現存していること、[-as-/ras-] が全世代を通して他の三地域よりも高い敬意を持っていることがわかった。

図1 熊本市における世代間の待遇表現の変遷（本稿の調査地域）

	尊敬表現		丁寧表現		
高年層	[-nahar-]		[-as-/ras-]		
	[-as-/ras-]		[-desu-]		
			[-nas-] (命令形 [-nasse], 禁止の命令形 [-nasuna] (運用は広範囲))		
			[-r-/rar-] (目下専用)		
中年層	尊敬表現		丁寧表現		衰退
	[-nahar-]		[-as-/ras-]		<del>[-r-/rar-]</del>
	[-as-/ras-]		[-r-/rar-]		
			[-desu-]		
			[-nas-] (命令形 [-nasse], 禁止の命令形 [-nasuna] (運用に個人差あり))		

	尊敬表現		丁寧表現		衰退
若年層	[-nahaŋ-] (あまり使用しないが 敬意は理解できる。)		[-as-/-ras-] [-desu-] [-nas-] (命令形 [-nasse], 禁止の命令形 [-nasuna] (親しい相手向け)		<del>[-desu-]</del>
	[-as-/-ras-]				

以上が今回の調査・分析で明らかになった熊本県熊本市における待遇表現の使用実態である。今回は聞き手と動作主体、文の種類を設定して調査を行ったが、場面別や男女差による使い分けの追加調査が求められる。また、熊本市は熊本県内でも比較的広い市であるため、同じ市内であっても地区によっては使用形式や使用方法が異なる可能性があり、今後データを確かなものとするためには地域ごとの調査が必要となる。さらに、今回挙げた禁止の命令表現[-nasuna]において使い分けと意味に大きな違いが発見されたため、詳しい調査を行う必要があると考える。

### 使用文献

- 岩永健治郎 (2018) 『熊本県上益城郡嘉島町周辺地域の待遇表現について』『国文研究』第 63 号 44-64 熊本県立大学日本語日本文学科文学会
- 尾川慧 (2018) 『熊本県葦北郡芦北町方言における待遇表現』『国文研究』第 63 号 66-86 熊本県立大学日本語日本文学科文学会
- 神部宏泰 (1992) 『九州方言の表現論的研究』和泉書院
- 新堀史絵 (1998) 『敬語表現における熊本方言ース・サス表現を中心としてー』『国文研究』第 43 号 77-97 熊本県立大学日本語日本文学科文学会
- 藤原与一 (1978) 『方言敬語法の研究の昭和日本語方言の総合研究第一巻』春陽堂
- 藤原与一 (1979) 『方言敬語法の研究の昭和日本語方言の総合研究第二巻』春陽堂
- 渡辺千尋 (2017) 『熊本県菊池郡大津町方言における待遇表現』『国文研究』第 62 号 63-82 熊本県立大学日本語日本文学科文学会



## 引用 URL

熊本市ホームページ

[https://www.city.kumamoto.jp/hpkiji/pub/detail.aspx?c\\_id=5&id=1928&class\\_set\\_id=2&class\\_id=139](https://www.city.kumamoto.jp/hpkiji/pub/detail.aspx?c_id=5&id=1928&class_set_id=2&class_id=139)（最終アクセス日 2022 年 1 月 10 日）

熊本市観光ガイド

<https://kumamoto-guide.jp/7attractions/>（最終アクセス日 2022 年 1 月 10 日）

## 謝辞

本論文は筆者が熊本県立大学文学部に提出した卒業論文をもとにしており、執筆にあたり、丁寧かつ熱心なご指導をいただきました小川晋史先生に深謝いたします。また、調査に快く協力してくださった話者の皆様に心より御礼申し上げます。